

明治三十四年五月十日

帝國日本政府ト帝國大不列顛政府ト郵便交換ノ道
ヲ開カントスルヲ以テ同國政府委員ト右ノ條目ヲ
商議シ訂約調印可致事

外務卿

本局議案 十年五月十日

別紙外務省同郵便條約ノ儀ニ付英國駐劄上野特命
全權公使佛國駐劄中野臨時代理公使ハ御下付可相
成御委任狀ノ儀^{當時西京御駐劄中野臨時代理公使ニ付外務省ヨリ奉}獨逸國駐劄青木公使^{同置度儀}ノ例ニ倣ヒ
取計候趣ニ付左ノ通御指令相成リ可然哉此段相伺
候也 五月十日

六月十九日

十年

第四拾五號

今般萬國郵便聯合條約ハ連盟相成候ニ付別冊相添此
旨布告候事

萬國郵便聯合條約

明治三十四年
十月二十日
在柏林
簽名

千八百七十四年即チ明治七年十月九日瑞西國ベルン府ニ於テ締結セル萬國郵便聯合條約

下ニ記名スル各國政府ノ全權公使ハ衆員ノ協議ニヨリ更ニ批准ヲ得ヘキモノトシテ左ノ條約ヲ修整セリ

第一條

締盟ノ諸國ハ各々其郵便局ノ間ニ郵便物ヲ交換セン爲メ萬國郵便聯合ノ名義ヲ以テ單一ノ郵便邦彊ヲ畫スヘシ

第二條

此條約ニ遵テ交換スヘキモノハ聯合ノ諸國ヨリ發シ聯合ノ諸國ニ

二
遞送スヘキ信書端書書籍新聞紙諸般ノ印刷物其他商品ノ見本公用
及ヒ商用上ノ書類トス

又聯合ノ諸國ト聯合外ノ諸國ノ間ニ前節記載ノ郵便物ヲ交換スル
ヲアルヘシ但シ此交換ハ少ナクモ二個以上聯合ノ州郡ヲ要スル
ニ限ルヘシ

第三條

聯合疆内ニ於テ拂ハシムヘキ郵便税ハ前拂ニテ信書一通廿五セン
テム一センテムハ我カ凡ソト定ム可シ然レモ通貨其他計算上ノ異
同ヲ調理セン爲メ右定税ヲ多少増減スルハ各國其自由ニ任スヘシ
尤モ此増減ハ三十五センテムヨリ過超セサルヘク廿センテムヨリ
減少セサルヘシ

重量十五グラムニ過キサレ信書ハ一通トナスヘシ故ニ此重量ニ超
ル信書ハ毎十五グラム若シクハ其分數毎ニ一通ツ、定税ヲ拂ハ
シムベシ

前拂セザル信書ハ其届先ノ國ニ於テ二倍税ヲ拂ハシムヘシ郵便端
書ハ前拂スルヲ以テ定則トス尤モ其税額ハ前拂信書定税ノ半減タ
ルヘシ若シ其税額ニ分數ヲ生スルカ如キハ之ヲ全數ニ充テヘシ
聯合ノ疆内ニ於テ海運ノ路程三百海里以上ニ及フモノハ通常税ノ
外更ニ増税ヲ拂ハシム此増税ハ聯合疆内ニ於テ前拂信書定税ノ半
額ニ超ユヘカラス

第四條

公券及ヒ商用上ノ書類商品ノ見本新聞紙假綴又ハ本綴ノ書籍雜誌、

樂譜、名刺書、名錄、大意報告書、又ハ廣告書類ハ活版木板ニ拘ハラズ
石版筆書寫真ヲ間ハフ聯合全國ヲ通シテ一箇七センチムツ、ノ定
税ヲ拂ハシムヘシ然レトモ通貨其他計算上ノ差同ヲ調理セン爲メ
右定税ヲ多少増減スルハ各國其自由ニ任スヘシ尤モ此増減ハ十一
センチムヨリ過超セサルヘク五センチムヨリ低減セサル可シ
重量五十グラムニ過キサルモノヲ以テ一箇トナスヘシ故ニ此重量
ニ超ルモノハ五十グラム毎ニ若シクハ其分數毎ニ一箇ノ定税ヲ拂
ハシムヘシ

聯合疆内ニ於テ海運ノ路程三百海里以上ニ及フモノハ通常税ノ外
更ニ増税ヲ拂ハシムヘシ
但シ此増税ハ聯合疆内ニ於テ此種ノ郵便物ヨリ拂ハシムヘキ定税

ノ半額ニ過クヘカラス

此種ノ郵便物ノ最大重量ハ商品見本類ヲ二百五十グラム其他ノ郵
便物ハ總テ一千グラムト制限スヘシ

聯合ノ各國政府ハ其國ノ政令法度ニ矛盾シテ發行セル此種ノ郵便
物ヲ其國境ヲ通シテ遞送配達セサルノ權利ヲ有スヘシ

第五條

第二條ニ記載シタル郵便物ハ書留ヲ以テ遞送スルヲ得ベシ

各書留ノ郵便物ハ前拂セザルヘカラス

前拂ハ書留郵便物又ハ書留ニアラサル郵便物モ同様タルヘシ

書留手数料及ヒ書留ヲ領受シタル報知ノ手数料ハ之ヲ發出スル國
ノ内地郵便成規ニ遵テ取立可キ金額ニ過クヘカラス

非常變災ヲ除クノ外其他ノ原因ニヨリ書留郵便物ヲ毀失スルキハ
毀失ヲ釀シタル地ノ郵便局又ハ其海運ヲ取扱タル局ヨリ五十フ
シク一フヲシテハ我凡ノ償金ヲ其差出人又ハ差出人ノ望ミニヨリ
受取人ヘ拂フヘシ尤モ國法ニヨリ書留郵便物ノ危難辨償ヲ擔保セ
サル郵便局ハ此限ニアラス

此償金ハ成丈ケ遲滯ナク拂フヘシ若シ遲滯スルモ其請求ヲ促シタ
ル日ヨリ一ケ年ヲ過クヘカラス

請求ヲ促カスノ時限ハ最初其書留ヲ差出シタル時ヨリ一ケ年ノ中
ニ促カスヘシ此期ヲ過クレハ其請求ヲ許ルサス

第六條

各種郵便物ノ前拂ハ之ヲ發出スル國ニ於テ發行セル郵便切手又ハ

郵便封皮ヲ以テスヘシ

前拂セサル又ハ不充分ニ前拂シタル新聞紙又ハ其他ノ出版物ハ之
ヲ遞送スヘカラス尤モ其他ノ郵便物ハ前拂セサルモ不充分ニ前拂
セルモ總テ前拂セサル信書ト見做シテ之ヲ遞送シ信書定税ノ二倍
ヲ取立ヘシ但シ郵便封皮或ハ切手ヲ以テ多少ノ税ヲ拂ヘルモノハ
之ヲ引去リ右倍税ニ算入スヘシ

第七條

聯合疆内ニ於テハ郵便物ヲ再達ノ爲メ何等ノ増税ヲモ取立ヘカラ
ス

然レトモ聯合ノ一國內ニ發シタル其内地遞送ノ郵便物ヲ再達ノ爲
メ聯合ノ他國ヘ其内地遞送トシテ差立ルルハ其届先ノ郵便局ニ於

テ其内地遞送税ヲ増加スヘシ

第八條

郵便事務ニ關シタル公用信書ハ都テ無税ニテ遞送スヘシ尤モ右公用信書ノ外ハ無税又ハ減税遞送ヲ許ルサス

第九條

既ニ記載シタル第三第四第五第六第七條ニ依憑シテ領受セル金額ハ各局ノ所得トシテ之ヲ収ム可シ故ニ聯合ノ各郵便局ハ互ニ計算ヲ保ツニ及ハス
信書其他ノ郵便物ハ前數條ニ記載スル如ク當然拂ハシムヘキ税額ノ外發出地又ハ到着地ヲ問ハス差出人或ハ請取人ヨリ何等ノ税ヲモ取立ヘカラス

第十條

聯合ノ疆内ヲ通シテ繼越郵便ヲ往復スルハ正ニ其自由ヲ保證スヘシ故ニ聯合ノ各郵便局ハ其時ノ都合ト事務ノ緩急ニ依リ開囊又ハ開囊ヲ以テ其媒介國ヲ通シ互ニ繼越物ヲ遞送交換スルハ全ク其自由ニ任スヘシ

開囊又ハ開囊ハ其郵便局ノ任意ヲ以テ最モ速達スヘキ線路ヘ向ケ之ヲ遞送スヘシ若シ數條ノ線路均シク速達シ得ヘキカ如キハ其差立局於テ其最モ速達シ得ヘキ線路ヲ撰定スルノ權理ヲ有セリ
信書其他ノ郵便物ノ數夥多ニシテ繼越局ノ手數ヲ煩ハスニ足ルモノ、如キハ開囊ニ仕立ルヲ以テ通例トス但シ差立ノ郵便局ハ其因故ヲ告知スヘシ

差立局ハ其繼越局ニ對シテ開囊又ハ開囊ニ拘ハラス信書ハ正量キログラムニ付二フランク第四條ニ掲載セル郵便物ハ正量キログラムニ付二十五センチナムツ、手数料トシテ拂フヘシ

一ノ媒介局ヲ通シテ繼越スヘキ郵便物ノ重量七百五十キログラム以上ニ至ルキハ此手数料ヲ増加シテ信書ハ四フランク第四條ノ郵便物ハ五十センチナムトナスベシ

然レ繼越郵便ノ爲メ是迄現ニ手数料ヲ取立サルカ或ハ下低ノ課金ヲ收入シ來タル場合ニ於テハ從前ノ振合ニ遵フ可ハ勿論ノコトスレ聯合ノ疆内ニ於テ路程三百海里以上ヲ通シ繼越物ヲ海運スルキハ其海運ノ取扱ヲナセル若シクハ其事業ヲ維持スル郵便局ハ其海運ニ属スル費用ヲ領受スルノ權理ヲ有スヘシ

聯合ノ各局ハ此海運ニ屬スル費用ノ成丈ケ減少センコトヲ勤トムヘシ

海運ノ事業ヲ維持スル郵便局ハ信書ハ正量キログラムニ付六フランク五十センチナム第四條ノ郵便物ハ正量キログラムニ付五十センチナムヲ過キサル金額ヲ其差立局ヨリ要請スルヲ得ヘシ

此海運ノ費用ハ前節記載ノ金額ヨリ決シテ多カラサルヘシ故ニ現費ヨリ多キ金額ヲ海路運送ノ費用トシテ拂フヘカラス

開囊又ハ開囊ニ拘ハラス繼越郵便物ノ重量ヲ整調セン爲メ双方ノ協議ヲ以テ其勘定期限ヲ約シ曾テ二週間遞送セシモノ、計算ヲナスヘシ此計算ハ他日精算仕上ケテ爲ス迄双方ノ郵便局ニ於テ計算ノ根基トナスヘシ各局夫々精算仕上ケテ督促スルヲ得ヘシ

第一 繼越物ノ遞送方法ニ於テ必要ナル變更ヲナセシ場合ニ於テ

第二 最前計算ヲ爲シタル日ヨリ一ケ年ノ期限ノ過キ去ルキニ於テ

本條ノ諸節目ハ印度郵便又ハ紐約桑港間ノ鐵道ニ依リ合衆國ヲ横截シテ到着セルモノニ其効力ヲ及ボサ、ルモノトス斯ノ如キ郵便事務ハ其相關涉セル郵便局ノ間ニ取極メタル一種ノ約條トシテ其取扱ヲ續クヘシ

第十一條

聯合ノ諸國ト聯合外ノ諸國ノ間ノ約束ハ即今存在スル又ハ將來締結スヘキ一種ノ條約ニ依テ之ヲ整理スヘシ

聯合國外ニ遞送スヘキ郵稅ハ前節一種ノ條約ニ依テ之ヲ定ム可シ此場合ニ於テハ聯合内ノ定稅ニ右ノ稅額ヲ加フヘシ

第九條ノ節目ニ從テ聯合内ノ定稅ヲ左ノ如ク割合フヘシ

第一 聯合ノ差立局ハ他ノ外國ヘ差立タル前拂郵便物ヨリ其聯合内定稅ノ全額ヲ取領シ得ヘシ

第二 他ノ外國ヨリ發セシ前拂セサル郵便物ヲ受取タル局ハ其聯合内定稅ノ全額ヲ取領シ得ヘシ

第三 他ノ外國ト閉囊ヲ交換スル聯合内ノ郵便局ハ其外國ヨリ到着セル前拂ノ郵便物及ヒ其外國ヘ差立タル前拂セサル郵便物ヨリ其聯合内定稅ノ全額ヲ取領シ得ヘシ

第一第二第三項ニ記載セシ場合ニ於テ外國ト郵便物ヲ交換スル局

ハ繼越ノ爲ノ何等ノ勘定ヲ要求スルヲ得ス然レトモ其他ノ場合ニ於テハ總テ第十條ノ箇條ニ遵テ繼越ノ爲勘定ヲ求ムルヲ得ヘシ

第十二條

價額公記ノ書狀及ヒ郵便爲替証書ノ交換ハ聯合ノ數國若シクハ其群國ノ間ニ特別ノ約條ヲ以テ之ヲ定ム可シ

第十三條

聯合各國ノ郵便局ハ此條約ヲ實施セン爲メ協同會議ヲ以テ必要ナル細目及ヒ順序ヲ規畫シ以テ細目規則ヲ定ム可シ

此細目規則ノ條款ハ協同會議ヲ以テ尙ホ之ヲ變更シ得ヘキハ勿論タルヘシ

總テ聯合ニ干涉セサル事件例ヘハ分界地ノ交換方法近國ヲ通シテ

低稅遞送ノ區域ヲ定メ郵便爲替証書及ヒ價額公記書狀等ノ交換方法ヲ定ムルカ如キハ各局ニ於テ夫々適切ノ處分ヲナスベシ

第十四條

此條約ノ諸條款ハ各國内地ノ郵便成規ヲ變更スルノ効力ナキモノトス且郵便事務ヲシテ一層簡便ナラシムルノ目的ヲ以テ數國相聯結シ或ハ締盟スルノ自由ヲ束縛スルヲナシ

第十五條

萬國郵便聯合總理局ノ名義ヲ以テ一ノ中央局ヲ置キ會同ヲ以テ撰舉シタル一ノ郵便全權ヲシテ之ヲ擔當監檢セシム可シ其諸費ノ如キハ聯合各國ヨリ之ヲ給ス可シ

此總理局ノ主務ハ萬國郵便事務ニ關涉セル各般ノ報知ヲ拾取シ之

ヲ上木シ之ヲ頒布スヘシ且若シ聯合ノ兩國異議ヲ生スルカ如キハ其告發ヲ得テ之カ説明ヲ附スヘク、細目規則ヲ變更スルニ臨シテ先ツ其問題ヲ觸知スヘク、一般ニ係ル計算ヲ簡易ナラシム可ク殊ニ第十條ノ出納ヲ詳明ナラシム可シ總テ聯合全國ニ關スル利害ヲ攻察シ宜ニ隨テ之ヲ裁理スヘシ

第十六條

此條約ノ意味ヲ說解スルニ係リ聯合内ノ二局以上異論ヲ構ヒルハ中裁判ニ依テ之ヲ斷決スヘシ故ニ異論ヲ生シタル各局ハ此事ニ關係ナキ聯合内ノ他局ヲ推シテ之ニ當ラシム可シ
此斷決ハ中裁判員ノ多數ヲ以テ定ム可シ若シ同數兩分スル方如キハ此中裁判員タル者齊シク此事ニ關係ナキ他局ヲ推シテ更ニ其斷

決ヲナサシム可シ

第十七條

海外ノ諸國新タニ此聯合ニ加入セント要セハ左ノ順序ニ照準スヘシ

第一 聯合ニ加入セント欲スルノ國ハ萬國郵便聯合總理局ノ事務ヲ主理スル全權ニ之ヲ請願スヘシ

第二 聯合ニ加入セント要セハ聯合條約ノ諸節目ヲ履行セサルヘカラス尤モ海路遞送ノ經費ノ如キハ別種ノ協議ニ遵フヘシ

第三 聯合ニ加入セントセハ先ツ郵便交換條約既整國ノ全權即チ直接ノ關係ヲ有スル國ノ全權ノ間ニ於テ協議ヲ得ン

ヲ要ス

第四 此協議ヲ遂シカ爲メ萬國郵便聯合總理局ヲ主理セル全權ハ若シ機會ヲ得ハ紹介スル全權ト加入ヲ希望スル全權ノ會議ヲ命スヘシ

第五 此協議整頓スルハ萬國郵便聯合總理局ヲ主理セル全權ヨリ之ヲ聯合ノ諸國ニ報知スヘシ

第六 之ヲ報知スルノ日ヨリ算シテ六週間ノ中ニ故障ヲ發スルモノナキハ其加入ヲ許可セシモノト看做シ主理ノ全權ヨリ加入ノ全權ニ其事ヲ報知スヘシ然ル后其主理スル全權ノ政府ト其加入セル全權ノ政府ト特命ヲ以テ其加入ヲ確實ナラシム可シ

第十八條

此條約ニ加ハル各國全權公使ハ少ナクモ毎三ケ年ニ於テ會同合議シ以テ聯合ノ方法ヲ完全ニシ以テ緊要ノ釐正ヲ加ヘ以テ一般ノ得失ヲ論定スヘシ

發聲ノ權理ハ各國各々一トス

各國一員若シクハ數員ヲ出シテ代理セシムルモ或ハ他國ノ委員ヲシテ其代理ヲ兼テシムルモ妨ケアルコトナシ

然レトモ一國ノ委員ハ其自國ヲ併セテ二ケ國ヲ限リ代理スルヲ得ヘキハ勿論タルヘシ

次後ノ會同ハ千八百七十七年佛國巴黎府ニ於テ之ヲ開クヘシ然レトモ少ナクモ聯合國ノ三分一ノモノヨリ其期ヲ急促スルハ之ヲ

縮スヘシ

第十九條

此條約ハ千八百七十五年即チ明治八年第七月一日ヨリ施行スヘシ
但シ施行ノ期限ハ當日ヨリ三ケ年ト定ム可シ
滿三ケ年後ニ至ルモ尙ホ此期ヲ伸長スルヲ得ヘシ然レトモ聯合ヲ
脫セントスルノ各國ハ一ケ年前ノ報告ヲ以テ退去スルノ自由ヲ有
ス可シ

第二十條

此條約實施ノ日ヨリ是迄各國及ヒ各局ノ間ニ取結タル別種ノ條約
中此條約ノ箇條ニ抵觸スルモノ及ヒ第十四條ノ節目ヲ妨害セサル
モノハ總テ廢止スヘシ

此條約ハ成丈ケ速カニ批准ヲ要スヘシ其最モ遲延ニ至ルモ實施前
三ケ年ヲ出ヘカラス但シ批准ノ交換ハベルン府ニ於テ執行フヘシ
下ニ掲ケタル各國政府ノ全權公使ハ此條約ヲ證セン爲メ千八百七
十四年即チ明治七年第十月九日ベルン府ニ於テ手書記名スルモノ
也

各國政府ノ全權公使手記記名ハ略之